

思ひ草

第29号

令和元(2019)年7月3日 発行

新たな出発 一人間開発学部教育実践総合センター 次の10年へー

國學院大學人間開発学部長 なりた のぶこ 成田 信子



國學院大學人間開発学部は平成30年に創立10周年を迎えました。横浜市青葉区のとまプラーザキャンパスに國學院大學5番目の学部としてスタートして10年たったのです。教育系の新学部は「人間開発」の理念の下に、「人づくりのプロ」を育成することをめざして歩んできました。学部附設のセンターである教育実践総合センターは、地域教育への貢献、学生支援の二つの領域で実に多くの事業を行ってきました。詳しくは過去の「思ひ草」を参照いただきたいのですが、センターの事業の下に、この間多くの卒業生が育ち、小学校、中学校、幼稚園等の教育現場、保育所・施設等の保育現場、スポーツ等の企業、公的機関等で活躍しています。

卒業生の就職先から、人間開発学部の学生は一味違うと嬉しい声をいただきます。多くの卒業生が人とかかわり、

人に学ぶ姿勢がある、と評価をいただいています。母校に立ち寄ってくれた卒業生からも、社会人として生き生きと勤め、学んでいる様子がうかがえて確かな手応えを感じます。

さてこれからの10年は、人間開発学部の真価が問われる大事な時期です。これまでの成果に基づきながらも、地域に学生が出ていくことの意義を学生、教員、学部、大学という視点から見つめ直し、また地域の学校や施設、地域住民の側からも意義を見出さずにはいられず機会を設けていきたいものです。最近「WinWin」とはよく言われるワードになりましたが、実利的なことだけではなく、「人間開発」の理念の根本である人間力を育む面での「WinWin」をめざしたいものです。

「共育」、「響同」を胸に

教育実践総合センター長 たかやま まこと 高山 真琴



國學院大學人間開発学部創設と共に立ち上がった教育実践総合センターは、教職を目指す学生の学びへの支援と、地域の学校や教育機関の教育実践に寄与することを目的とした支援という役割を担い、今年で11年目を迎えました。

教育の現場で求められる「実践力を備えた教員」として学生が育つためには、机上の学びとともに、身をもって「学校を知る」ということが何より大切になります。教育実習に出向く前段階として、教育インターンシップ生として実習校に受け入れていただいた学生は、学校における様々な教育活動に従事しながら、教職の現場への理解を深めていきます。子どもたちとの関わりに一喜一憂しながら、「先生」としての自覚が芽生えてくるのもこの時期のようです。実践という体験を経て、喜びや苦悩を抱えて大学に戻ってきた学生がセンターを訪ね、その思いを懸命に話す横顔を見る時、学生であることから少しずつ脱皮を始めているよう

に見え、体験がいかに大きな学びとなるかを改めて実感することができます。

教育現場と学生をつなぐ、このことはセンターが取り組む学生支援の領域の一例ですが、地域の教育実践に寄与することを目的としてセンターが毎年行う取り組みの一つに「夏季教育講座」があります。教育における今日的課題を現場の先生方と共有し、先生方のよりよい教育実践に資することを目的とする教育実践フォーラムとして、今年度は「新しい教育課程の基準とこれからの教育・保育～育成を目指す資質・能力と評価～」をテーマに6つの分科会を立ち上げました。

共に学び合い(共育)、共に響き合う(響同)ことを理念に掲げる人間開発学部敷設のセンターとして、これからも、学生、地域、そして大学をつなぎ、教育の未来を切り拓く一翼を担っていきたくと考えます。

教育実習・保育実習

記録の意義とは

子ども支援学科准教授 吉永 安里

実習後「日誌が大変でした」という声がしばしば聞かれる。気を張って、目を凝らして子どもや保育者の様子を観察するだけでも最初のうちは難しい。加えて、毎朝の砂おこしや掃除等の環境整備、保育後の教材製作や次の日の環境設定と、たくさんの仕事の後で日誌を書くとなれば体力的にもきついだらう。では、どうして日誌を書かねばならないのだろうか。また、なぜその日のうちに書く必要があるのでらうか。

保育における記録は、日誌もその一つであるが、自身の保育を振り返って次の日の指導に生かす大きな手がかりであり、子どもの成長の足跡を示すものでもある。実習生だけでなく、保育者も日々記録をつけている。子ども毎に記録を取る園もあれば、その日の特徴的なエピソードを書く園もある。また、園の環境図に遊びとそこに関わった子どもたちの様子を書き込む園もある。最近では、写真を使った記録方法も広く知られるようになってきた。いずれにせよ、その日のうちに書くことで詳細で正確な記録を取ることができるのである。そうした日々の記録をつなげてみると、子どもの育ちと学びの連続性や変化を知ることができる。そして今日までの姿から明日の子どもの姿の予測をたて、保育計画を練り直し、環境設定に生かすのである。それだけでなく、記録は他の保育者と共有することで、多様な視点で省察を深めることができる。さらには写真や図などを用いてわかりやすい記録を工夫することで、子どもたちや保護者、小学校の先生等にも遊びや保育の意味を効果的に伝えることができる。

実習日誌をつけることは、その第一歩である。毎日書くことで、子どもの姿や成長、そして保育者の意図が見えるようになる。また、実習園の先生方からご指導をいただいて、分かりやすい書き方、多面的な見方ができるようになってくる。実習を通して学生が記録の意義について実感を深め、実習日誌に真摯に取り組んでくれることを願っている。

日誌を書いて気づいたこと

子ども支援学科 4年 幸坂 樹

教育実習で、特に大切にしていたことがあります。それは「あとで読んで、その時の様子が目に浮かぶ日誌を書くこと」です。具体的には「いつ、どこで、だれが、どのようなことをし、その結果どうなったのか」をわかりやすく記録することを意識しました。その時の状況を絵や図を用いて、視覚的にわかりやすくする工夫もしました。

毎日日誌を書いていると、様々な気づきがあります。例えば、私の実習園では年長児がキャンプに向けてエプロンを製作する活動が行われました。ある日、エプロンの形を決める話し合いが行われました。また後日、エプロンに思い思いの絵を描く活動が行われました。この2日間の活動の記録を振り返って読み直してみると、キャンプに向けてエプロンの形から子どもたちが話し合い、それぞれのエプロンに自由に絵を描けるようにすることで、子どもたちがキャンプへの期待をもってエプロンづくりに主体的に取り組めるように指導教諭が配慮をしていたことがわかりました。このように継続して行われている活動では、内容がどのように展開したのか、子どもの様子にどのような変化があったのか記録から読み取ることができました。一方で、昨日とは異なる遊びや活動が見られるときもありました。そのような時は、昨日までと何が異なり、その変化にはどのような意味があるのかを考察しました。時系列の記録だけでなく、自分なりに考察したことを書くと、指導教諭がそのことについてのご指導を下さり、子どもの遊びや活動、子どもの思い、関係性などについての自分の見方や考え方を客観的に見つめなおすことができ、その後の実習に生かすことができました。

私は将来、保育者になりたいと思っています。就職をしてからも教育実習や保育実習で学んだ記録の取り方、また記録をとることの重要性を忘れず、日々の振り返りを大切にしながら保育者として成長していきたいと考えています。



教育インターンシップ

今年度も2年生の学生が5月から教育インターンシップに取り組んでいます。学校や園・施設などの現場での貴重な経験を通して、教員や保育士などの仕事を理解するとともに子ども理解を進めています。この経験を今後の教育・保育実習に生かしていきます。

子どもたちに触れて感じたこと

初等教育学科 2年 金子 智喜

私が教育インターンシップの活動を始めたのは5月からでした。毎週金曜日に一日一つのクラスの見学をさせていただいています。一日そのクラスの子どもたちと過ごすため、学ぶことも多く、たくさんの発見があり、とても充実した活動をしています。

インターンシップで特に印象に残った出来事を2つ紹介しようと思います。

一つ目は、図工の授業の時の出来事です。「ねんどで家を作ろう」というテーマで、子どもたちがねんどの壁や窓にニードルで模様を描いていました。ある男の子がそのねんどをニードルで繰り返し突き刺して、私は「ちょっとやりすぎだなあ」と思っていたのですが、これもその子の個性なのだろうと思い、「いいね」と言っていました。しかしそのあと図工の先生が来て、その子は雷の模様を描きたかったのにうまくできず、苛立ちをねんどにぶつけていただけだったと判明したのです。見ればとてもつまらなそうな表情で作業していました。子どもを否定することはよくないけれど、かといって子どもをよく見もせずただ肯定するだけなのもよくないということが身にしみた一件でした。

二つ目は、掃除の時間です。私は教室から離れた教室の掃除の班について行ったのですが、先生の目が届かないところなのだから多少遊んだりしてしまうものなのだろうなと思っていました(少なくとも子どもの頃の私はそうでした)。しかしまったくそんなことはなく、むしろ私の掃除の仕方を注意してくるくらいで、本当に班全員がとても真面目に取り組んでいました。そのクラスだけでなく他のクラスも同様で、私はその真面目さに何度も驚かされてきました。

子どもたちは個性に富み、気持ちの表現はまだ少し苦手だけれど、根はみんな真面目です。素直で何事にも一生懸命取り組んでいる様子が、どこのクラスに行ってもひしひしと感じられます。私は、そんな子どもたちをよく観察し、一人の人間として尊重し、一生懸命な子どもたちに誠実に応えていく努力のできる教員を目指していきたいと思ひます。

自ら学ぶということ

健康体育学科 2年 吉江 諒介

私は現在、横浜市の中学校にてインターンシップの活動に参加させていただいております。週に2度、保健体育の授業と特別支援学級の授業にアシスタントとして中学生と共に学んでおります。

中学校での活動は、大学で学ぶ講義の内容の確認や実践ができるだけでなく、とても気づかされることが多く、毎回毎日が新鮮です。

例えば、授業中に手を挙げて発言をするという事。先生に質問をするときや、自分の考えを発言してくださいといったときに、生徒の手がすぐに挙がります。臆することなく手を挙げる生徒を見て、自分はいつから授業で手を挙げるのがなくなったのだろうかと考えさせられました。また、保健体育の授業では学習カードをよく利用して授業を行っています。学習カードには授業ごとの目当てや目標、気づいたことや反省が書けるようになっています。毎回の目標を明確にすることで、生徒は目標達成のために自分が次にやらなくてはいけないことを自分たちで探すようになっていました。

中学生を見ていると、自ら動くことにより答えを得ていた様子が感じます。答えのない問いに対する自分なりの答えというのは、自分で動いたときにしか得られません。加えて、自分を成長させるには、自分に合った課題を見つけ、それを解決していく力が必要となります。自主的に学ぶことのメリットとしては、力がつくという事もありますが、自ら考えることができ一人一人のモチベーションも高くなるという事です。そのおかげか、運動が得意でない子であっても進んで体育の授業に参加していました。

そんな今になって気づかされることが多い中学校の授業というのは、自分が出来ているかという事を問い掛けてくるように感じます。自ら考え行動することの大切さ、座学だけでは分からない現場の空気、そういったことを学べる事が出来るのは教育インターンシップならではのことであると思ひます。大学の講義で知識を得、教育インターンシップで実践をすることで自らの深い学びにつながるのだと思ひます。これからこの活動を通して自らで考え、広く深い学びにつなげ、成長できるようにしたいと思ひます。

教師塾 ～実践的な指導力や柔軟な対応力を学ぶ～

将来の夢が「教師になること」から 「よい教師を目指すこと」へ変化した私

初等教育学科 4年 中崎 桃子

東京教師養成塾では、月2回の講座、報告書作成に加え、年間を通した特別教育実習があり、月一度の研究授業や年間40時間以上の授業実践など盛りだくさんです。

以前の私は「教師になること」が目標でしたが、塾生になり「教師になってからが勝負」だと気が付きました。塾では、教師になってから困らないよう「教師0年生」の現段階から「教師1年生」を目指します。講座で授業づくりの基礎を学び、授業実践を通して学びを深めます。養成塾の教授や大学の先生、実習校の先生方からも手厚くご指導いただけるので自分の欠点や長所を的確に知ることができます。また、児童・保護者・教職員・地域から信頼される教師となるために必要な、社会人の礼節や報告・連絡・相談の仕方をも学びます。

養成塾は忙しく、正直辛く感じる時もあります。しかし、塾生として徹底して学ぶことで、来年はきっと自信をもって児童の前に立てると確信しています。常に高みを目指し、精一杯頑張りたいと思います。

実践力ある教員を目指して

初等教育学科 4年 島村 日菜子

私は、学校現場で即戦力として活躍できるような、実践力ある教員を目指して、埼玉教員養成セミナー受講しています。

セミナーでの大きな学びの一つに、講義・講演・演習があります。これまで、各分野の専門家や現職の先生方から、各教科の指導法や学級経営などについて学んできました。単に知識を得るだけにとどまらず、学校体験実習においてすぐに実践することによって、学びを深めています。この実習では、9ヶ月間という長い期間をかけて子どもたちと関係を築くことができるため、子どもたちの実態に応じた授業や指導を心がけることができるようになりました。

これまでのセミナーでの学びを通して、実践の場を数多く経験することの大切さを痛感しました。このあと7月には子どもたちの宿泊体験実習を実際に企画・運営する4泊5日の社会体験実習を、9月には県内の中学校で実習を行う異校種体験を控えています。教員としての土台を築けるよう、より一層励んでいきたいです。

第11回夏季教育講座 教育実践フォーラムのお知らせ

テーマ

『新しい教育課程の基準とこれからの教育・保育～育成を目指す資質・能力と評価～』

日時 令和元年7月28日(日)
13:00～17:00

会場 國學院大學たまプラーザキャンパス1号館

内容

- ◆全体会 基調講演他
- ◆分科会 ①幼保小連携 ②算数
③音楽 ④道徳 ⑤特別活動
⑥特別支援教育

参加費 無料

申込み 教育実践総合センター

*多くの皆様の参加をお待ちしています。

教育インターンシップ連絡協議会

日時

- 第1回 令和元年7月9日(火) 15:00～
- 第2回 令和元年12月25日(水) 14:00～

会場 國學院大學たまプラーザキャンパス1号館

内容 教育インターンシップをよりよい活動や学びにするために受け入れてくださっている学校・園・施設の方々と活動の様子について情報交換・意見交換を図る。

今年度のスタッフ

◆教育実践総合センター

センター長 高山 真琴

副センター長 田村 学

担当 小笠原優子 銀杏 陽子 唐沢はるみ

國學院大學人間開発学部教育実践総合センター

〒225-0003 横浜市青葉区新石川3-22-1

電話:045-904-7711 fax:045-904-7709